芸振

大分県芸術文化振興会議会報

県地方文化団体特集号

No.11　47．3

発行所・大分市大手町　県教育庁文化室内　県芸術文化振興会議事務局

発行人・米　田　貞　一　　編集人・田　村　卓　夫

美を求めて

米　田　貞　一

ちかごろの日本人はエコノミック・アニマルになったなどとよく言われますが、日本人ほど自然を愛し、それを生活と調和させ、心豊かに生きてきた――あるいは、生きようとする民族はめったにありません。和歌や俳句、川柳のような短詩形文学が昔から長い間国民に親しまれ、今でも熱心な愛好者がたくさんあります。お茶やお花も生活の芸道として庶民の中に深く根をおろし、若い層にも普及しております。そうした伝承にかぎらず、海外の新しいものもどんどん取り入れて、日本の芸術文化は、文学・美術・音楽・演劇・舞踊その他あらゆる部門で、さまざまな形態によって多彩な展開をしているのが現状です。しかし、よく見れば、そのきらびやかな発展のかげに、芸術文化のマス・プロによるあくどい商業化やうわついた形式化もないではありません。また戦後の過熱したＧＮＰ競争で、日本人全体が精神面を忘れ、人間性を見失ったところがあったかも知れません。

そうした中で、日本の美しさと日本人の心の美しさを書きつづけた川端康成氏が、世界の共感を得て、ノーベル文学賞を受けた事実は、私たちに大きな自信と反省を与えてくれました。たしかに日本民族の本心は自然と人間生活の中に美を求めてやまないきびしさとやさしさにあります。ただ茶をのむだけのことを、茶道の至芸にまで高めた利休には、一期一会のきびしさと親しい友が心をあたため合う感会のやさしさがあります。

「石仏」第3回日展　熊井惇（県美協常任委員・光風会員）

ここに日本の芸術、文化の本流があります。今日の工業化社会では↗物的繁栄に比例して自然の破壊、人間の疎外がいよいよひどくなりますが、それだけに現代人が一番強く求めつづけているのは、こうした美と幸福の精神であります。ローザック教授は、いま反体制といわれる青年たちが心の奥底から求めているものは、自然と人間への愛であると指摘しておりますが、これはおそらく日本の若者たちや良識のある国民の大多数にも共通することでありましょう。

たしかに現代の人間回復の欲求は社会の大きなうずになってきました私たちの古い先輩は、巡歴のくぐつ師や五条河原の念仏踊りから文楽や歌舞伎の芸術を育て、庶民のもてあそびの風俗画から比類のない浮世絵の美を完成しました。また最近の戦争時代には、死を前にした若い学徒兵が、荒廃の中でゲーテの詩集を読み、歌を作り、哲学を論じ、あるいは妻への遺書に「三児はどんな職業についても、学問と芸術を愛する人に育ててくれ」と書いております。およそいつの場合でも、学問と芸術、文化を大切にする日本人の生き方を私たちは忘れてはならないと思います。どんな職業、どんな土地、どんな時代であろうと、人間であるかぎり、この心を守り、自然と人間の中に美を求め、豊かな生活を築いていきたいと願ってやみません。

（県芸振会議会長）

日田文化連絡会

定期集会と年1回の総合発表会

空　閑　重　行

日田は天領だったこともあってか芸事の盛んなところで、いろいろな芸能文化団体も30を越えています。連絡会を結成したのが昭和45年5月、まだ発足わずかですが、加入団体は26になりました。

私たちの願いは

1　それぞれの団体が話し合いの場をもち、お互いの活動に協力し合えるようにしたい。

2　できれば、個々の団体ではむずかしい総合的な発表会や、中央文化の紹介、公演などにもとりくみたい。

ということでした。

昭和45年は市制施行30周年にあたり、12月「第1回市民芸能祭」をもって、たいへん盛り上がりを見ることができました。その後、市の行事に協力出演もありましたが、個々の団体の活動はともかくも、連絡会活動はやや低調の感があります。

これには問題がいろいろあるようです。

1　市行政の文化に対する目が冷たい。文化関係予算も殆んどないし、専任の職員もぜひおいてほしい。

2　会自体も、教育委員会にたよらず、自主的に活動できるまでになっていない。

3　加入団体も、個々の活動には熱があるが、総合的な協力には、まだ及ばない。

4　いろいろ性質の異なる団体が加入しているので、よい面もあるが、一方ではまとまりがつきにくい。

5　市民全体から見ればまだ一部の活動で、一般には無関心の者が多い。

ともあれ、さしあたっては、

◦集会を定期的にひらいて、お互いの話し合いを盛んにし、緊密な連絡をとり合うこと。

◦最低年1回の総合的な発表会をひらくこと。

を、努力目標にして、広く市民の関心を呼び起し、日田市の文化レベルのアップにつとめたいと思います。

（日田文化連絡会長）

国東文化協会

文化・仏跡の里に ふさわしいものへ

岐　部　与　平

本町文化協会は、昭和45年11月18日結成発足、いまやっと一歳の誕生日を迎えたばかりである現在16団体が加盟、傘下の会員は約 200名。昭和45年12月13日、設立を記念して第1回国東町芸能文化祭を町中央公民館で開いた。舞踊、邦楽、洋楽、謡曲詩吟など各部門の会員

「芸振」の2年間を

今後は大小いくつものグループ・サークルの声が百花斉放し、しかもそれぞれの自己主張が全体のものとなり、お互いの連帯感を強める方向に進むことが期待されますそのために「芸振」をもっともっと多数の方に読んでいただきたいし、そして感想なりご意見なりをどしどし編集部に送っていただきたいのです。そうすれば「芸振」をバラエティに富ませ、マンネリ化を防ぐだけでなく、大分県芸術文化振興会議そのものの民主的発展を促進することにもなるでありましょう。

事務局は便宜上役所のなかに置かれていますが、これは決して芸振会議なり「芸振」なりがオフィシャルな性格のものであってよいということではありません。芸振会議は文化的県民運動の連帯の場であり、「芸振」はそのための情報交流の役割を果たすことを確認したと思うのです。

三年目を迎え「芸振」一段の飛躍のためにどうかご協力をお願いします。

（県芸振会議事務局長・県教育庁文化室長）

県地方文化活動の胎動期

平　野　昭　彦

およそ文化というものは、より多くの人々の土着性の中に成育してきたものである。ところが、これまでの文化行政を省みると、ややもすれば専門的な芸術家を主体として人々に波紋を及ぼすという消極的傾向にあったことは否めない。また地域的にみると、大分市にウエイトが置かれすぎて地方活動の振興に遅れをとるという傾向もなかったわけではない。しかし、文化の持つ本質的意味から考えても、行政が特定の人々や限られた地域にだけ力を注ぐことにとどまっていてはならない。

文化活動をもっと広く県民の底辺にまで拡大し、地方活動の振興に尽力することが必要である。

本県の文化行政も、昨年4月から文化室が設けられ、中央舞台芸術、中央創作展などをできるだけ地方都市で公演公開するよう努めてきた。例えば、九州沖縄芸術祭の一環としての「九州交響楽団」の公演も日田市で、「沖縄民俗歌舞団」の公演を津久見市で、また文化庁と共催の移動芸術祭、オペラ「フィガロの結婚」を佐伯市で上演し、多くの県民に多大の感銘を与えることができた。

一方、地方文化施設の整備についても力を注いできたので、文化会館や公民館建設の気運が次第に充実してきた。津久見市民会館、佐伯文化会館があいついで完成し、文化活動の拠点として市民から活用され、その発展が期待されている。ひきつづ↗

が精魂を傾けて華やかに芸能を披露、盛大な芸能文化祭とすることに成功した。

昭和46年度は、第7回県芸術祭参加行事としてこれを組み、第2回国東町総合文化祭と銘打ち3日間にわたって実施した。11月28日芸能大会は、昨年第1回大会以後1年間の会員の努力のあとがありありとうかがわれ、さらに住民のなかに輪が広がり、定着発展を期待できるものがあった。

続く29・30の2日間は展示会とし、中央公民館8定期講座中作品展示の可能な書道・手芸・短歌・料理の4教室生に、民間生花グループを加え、5部門の作品211点（料理展示点数を除く）を展示、一般鑑賞者も約500名をかぞえた。

なお併催行事として、郷土の洋画家で日展審査員として名をなしている国見町出身の江藤哲画伯個展を教育委員会後援のもとに開き、総合文化祭をいっそう意義あるものとすることができた

今後の課題としては演劇、文学美術工芸、茶道、華道などの分野についても幅広い掘り起しとグループ育成を行ない、吸収加盟を促しながら、さらに当協会の発展をはかるとともに、文化と仏跡の里として名を馳せつつある郷土国東の地にふさわしいものに育てあげていくことであると考えている。

（国東町文化協会長・国東町長）

ふりかえって

田村卓夫

七〇年の八月に第一号がうぶ声をあげて以来、「芸振」は着実に隔月発行を維持してきました。これは実にすばらしいことです。この種の機関紙は、一般に発行期日が遅れがちで、記事内容も次第にマンネリ化し、先細りとなるのが例ですが、われわれの「芸振」に限っては号を追うほどにますます充実してきているといえます。これは、編集部に人を得たということが第一ですが、同時に多くの会員の方々の暖かい励ましのお陰でもあります。全く感謝に堪えない次第です。

創刊号発刊の際、わたしは「自分のジャンルやグループの殻に閉じ込もらないで、広場に出て話し合おう」と提案しました。編集部の非常な努力で、県単位の各ジャンルの活動状況なり、提言なりは一応この二年間で網羅されたと思いますが、しかし、まだまだ沈黙を守っているグループ・サークルもたくさんあります。特に、市町村地域における活動グループの登場が少なかったようです。（本号にかなり顔を見せてくれてはいますが）

山香町文化連盟

すべてが平等で素朴を愛す

倉田素直

山香町文化連盟が烏滸しくも本年度の県芸術祭に参加させて頂き、図ずも第8回山香町文化連盟の年中二大行事の一つである総合文化祭が本年度の芸術祭賞受賞の光栄に浴し、冷汗一斗果して何がどこが良かったのかと今さらながら反省せざるを得ないのであります。

ずい分以前から山香には「趣味の会」とか「青年演劇」というようなものが有ったようですが総合的なものは昭和40年頃から毎年文化祭を行なっています。それが何も野心的でなく、それぞれの各部門が必然的に融合、一つの固りとなって現在に及んだのは確かです。

「すべてが平等で素朴を愛す」こした気持ちで部門は今のところ9グループ。

美術（絵画）、書道、民踊（2）、音楽、短歌、俳句、生花盆栽、詩吟、

各部門ごとに、毎月の会合、研修、或は教室、各部役員（理事）3名宛、1年の計画を促進実行しています。

なお、年中二大行事として、

1、総合文化祭

2、総合研修旅行

また課題といえば

忘れていた1年1年の記録を残すべく計画。各部門とも山香町の意見一致をみ、準備を進め、有機的な連携のもとに各グル

↘き竹田市、宇佐市、玖珠町などでも会館建設の計画があると聞いている。

こうした地方文化活動の胎動が、各種の文化団体の結合を促し、団体相互の結束と交流をはかるための連合組織が、市町村段階で次第に結成され、それが母体となった総合文化祭の開催が県下各地でみられるようになってきた。今年度県芸術祭賞を受けた山香町文化祭にみられるように、町民の各層の参加による美術、書道、生花、写真展、音楽祭、郷土芸能の集い、短歌、俳句の会など町をあげての文化活動の集約がみられるようになってきた。こうした底辺の広い文化活動は、これまで文化の受容面だけにたたされていた多くの県民を、表現、発表という創作面に転換させていった功績は高く評価されるものといえよう。

こうした気運に乗じて、すべての市町村に文化活動を行なうのに適当な施設が整備充実されることが望まれる。

しかし、こうした施設の充実のみでは文化活動の発展は期せられない。施設と人を動かす指導者を欠くことはできない。自閉的でなく、県民文化の底辺を拡げていく協調的な、しかも格調の高い指導者を多数育成していくことも重要な課題の一つであろう。

文化というものは、語源からいっても、もっとも土臭い民衆の間に生まれ育ってきたものであろう。そうした意味では、文化の持つローカリティーこそ重視しなくてはなるまい。

文化の中央集権化が異様なまでに発達し、しかも限られた人たちの手にゆだねられてきた日本の場合、県段階、市町村段階での素朴だが生活に根づいた文化活動こそ、文化を正常なものにかえす大きな源動力であることを信じてやまない。

（県教育庁文化室主幹）

ープが「星座の如く」の夢を見て明日を迎えています。

なお文化祭の際の会場の不備が残念だが何とか近々の内に希望を満たして貰いたいものだと思っています。

また、近代施設の濁流に押されて消えてゆく古代文化の保存を大きく取り上げねばならないのではないかと考えています。

（山香町文化連盟副理事長）

犬飼町民文化会議

試練に立つ

渡辺泰三

総人口 5,700。貧しい町である。10年前に私たちが指摘した結果が今日的課題となっている。<社会教育の欠如>惜しみてもあまりある歳月となってしまった。当時はまだ全町民的行事は可能であったが一昨年あたりから不可能に近くなってきている。私たちが当初目的とした全町民的文化祭も、一部の物好き集団の文化祭と扱われ、認識の度合にも過疎化が現われている。

文明と文化を混同した考え方がぼう大なマスコミによってそのプログラムの中に組みこまれつつある社会環境。生活環境も物質的に文明化して豊かになっている。こうしたテンポと同じように〝文化〟を失っていることに気づかない。自分の力でかちとり、深め、工夫したりする創造意欲、文化的要求を忘れていくのである。与えられる圧倒的な物質文明に埋没してしまうのである。

昨年は盆踊り大会すら開催が危ぶまれた気憶も新しいが、私たちは今日の人間性と市民連帯意識のそう失という環境に埋没せぬよう数年来、よい演劇を観賞する運動を続けている。演劇要求の発掘と発展、さらに健全な観劇人口を絶えず総人口の1％を目標に連帯意識の回復も含めて大分労演の例会に参加している。現在60名近くの会員がいるが例会によっては大型貸切バスを用意するほどになったが伝統の青年演劇に若い世代を演劇創造活動として参加させ得ないのはやはりこれまでの社会教育の欠如ともいえよう。なぜならば中央公民館が無人の館となって7年にもなっているからである。従って公民館が中心となる文化的活動は皆無に等しい。だから町民の文化的要求の治療に労演は特効薬的役割りを果してくれている。文化活動に偏見を抱く人がいるならばその人は埋没から発生した公害に汚染されているといえよう。

さて、他町村の文化団体は、中央公民館が中心となり町当局が運営にあたっている。私たちが10年前に指摘した今日的課題は過疎化の中では当局が郷土芸能、郷土史、その他伝統行事を守り育てる姿勢が必要である。それには社会教育を充実して機能的な目的集団を多く創設する事であった。私たちの文化会議は財政的な維持は不可能となってきている。最大の今日的課題それは町当局に十分な社会教育予算の裏付けをして、目的集団を数多く町内に創設して若い世代の新鮮な社会教育主事が望まれてならないのである。社会構造が複雑になればなるほどシステム化は必要となる。少なくとも全町的行事が年に何度か主催できる中央公民館が欲しいものである。

人づくりを忘れて町づくりはできないのである。私見については「文化年鑑」の地方文化の項をご一読願いたい。

（犬飼町民文化会議事務局長・大分労演副委員長）

佐賀関文化協会

積極的な行事の開催

藤井　孝

永年文化団体連絡会を年間4回内至5回開催して、話し合いをしながら行事を進めて来ましたが、行事内容はいつも同じで進歩せず、音頭取りの公民館に対する評価は悪く、文化の向上をどのようにするかという課題が残され、その解消を要求されていた。

そこで文化協会の設立が必要であるという結論になり、昭和44年11月1日に規約を設定し文化協会が発足した。その機構は会長を町長にして副会長を2名、理事会により選出。理事は町内の団体、グループより各1名、計20団体グループより成立している。協会の目的は

イ、演奏、舞踊演劇等芸能発表会、文化講演、社会（生活）文化向上のための諸活動開催または後援。

ロ、諸文化活動に関する研修、講習会の開催または後援。

ハ、指導者等の紹介ニ加入団体相互の連絡と親睦。

ホ、その他文化活動に必要な事項。

上述により事業に取組み協会の年間の大きな行事としては春秋の二回文化祭と称して団体、グループの発表会を主に開催して

一人でも多くの人に読んでもらいたい

小林成一

芸振も発行されてから約2年を経過しました。大変結構な内容をもつもので編集者のご苦労に感謝するとともに一人でも多くの人に読んでもらいたいと思います。先般、芸術短大の学生二、三人にたずねたところ知らないとの答えがかへってきました。この調子では知らない人が多いと思われます。もちろん少ない費用なので発行部数も少ないにちがいないと思いますが、会員をふやすなり特定寄付を受けるなりの努力をして県民が一人でも多く読んでくれるようにして行きたいものだと思います。それが県民文化向上の一端につながると考へます。

（県芸振会議理事）

く、もっと、人間の普遍的な素質として芸術を解する能力を持ち合わせる一般市民へも強く呼びかけ、共々に豊かな心情を養い、真の生き甲斐が見出されるように心かけたい。

（県芸振会議理事）

いるが、団体グループとも自分たちの協会という意志が乏しく出演してやるんだという面が強く事務局（公民館）では困っている。

例えばプログラムの提出期限が守られずプロの順番に文句があり、また開催準備には係分担が決められているが、出て来ない等、色々の諸問題があり、その原因は芸能団体が主で出演するだけに追われ手一ぱいであり、他の団体はあんな恩しゅう会なら、と口には出さないが不満があり仲々連絡調整がつかないそこで本年度は全面的に改革を行ない文化向上のための協会にする計画を進めつつある。

また町の補助金は1万5千円支出しているが、この増額も要求されている。

文化協会として目的に沿って中央（大分市を中心に来る）芸能文化講演、展示会等を開き一般住民の文化の向上を図らねばならない課題が残されている。

（佐賀関町文化協会事務局長、佐賀関町公民館副館長）

各団体相互の交流

遠藤梢山

多種多彩で数多い会員を含む芸振の進め方には、多くの問題があると思う。思いつくままに充実改善すべき点をいくつか挙げてみよう。①各団体相互の交流をさらに密にすること。②一〇〇〇名ぐらい収容でき、だれもが利用しやすいホールの建設運動を進めること③時に会報「芸振」に各分野の先端を行く新鋭人の芸術文化的随筆を掲載すること。など、一般県民に芸術文化の必要性を浸透させること。以上のくふう企画をのぞむ。

（県芸振会議理事・県三曲協会長）

一般市民にも呼びかけを

利田正男

私たちは、文明の進歩の恩恵に浴しながら他面、人間がしいたげられていると歎く。これは、人間の本性にひそむ限りない欲求が、偏った形で充たされつつあるための不調和に起因するように思われも。そこで芸振活動が、単に所属団体会員だけのものとしてでな

津久見市文化協会

これからは一本立ち

左脇日出登

津久見市に文化協会（21団体加入）が結成されましたのが昭和46年2月24日です。これが準備結成の主体は教委社会教育係でした。これまでの津久見はスポーツの街としてあまりにも有名であり、その陰にあった文化団体が今や大きくはばたく時がきたのです。年同じく10月には市民会館が落成、市制20周年をあわせ祝賀記念行事が8日間にわたって催されました。協会も第1回発表会と名うって参加しましたが日程の関係から4日にわかれて出演することで運営の面で随分と心配しました。このことが会員たちには自分たちでなやらければならない義務感というか、お互いが〝やる意欲〟をもたざるを得ないことが結果的には成り行きの因となっていると思います。それからは一度も会合も事業も開いておりません、近々、新年度の事業計画、予算計画について検討しなければなりませんが、先日個人的に市教委とこのことで話したのであります。新年度事業や協会運営の予算については、発表会のための市民会館借上料年（5回）7万5千円、運営費としての市補助10万円は最少限確保しなければならないことをお互いに確認し新年度社会教育要求予算に、もりこむことにしました。何と申しましても津久見市は他市にくらべて文化面はおくれておりますので協会の前途には随分と問題もあろうと思いますが、現石田市長さんは社会教育については特に深いご理解と関心をもっておられると聞いておりますので意強くしています。

スタート以来、今もなお市教委に事務局をお願いし自主性、主体性とはうらはらにすべて事務局にオンブしています。このことは決して正しい姿ではないと思いますが現実には指導助言を願わねば運営できないあり様です。市教委も「これからは側面的な形で協力しいた」といっています。私たちも今は寄生的であっても早く一本立ちできる様に努力しています。協会の結成が当市の文化活動の始まりであり、これが契機となって今後の津久見市文化振興のための〝たて〟になればと思います。（津久見市文化協会長）

臼杵読書会

中心会員は20歳から25歳の人たち

吉田　公

1、現況

昭和38年に発足して以来、文学作品を中心に月2回の例会をはじめたが、いろいろと違った職場の仲間が集る関係で、3年目からは月1回の例会として充実することにした。会員の新陳代謝が激しく、リーダー格の人が次から次へと転勤や結婚のため抜けていったのが会の運営を困難にして来た。大体20歳から25歳の人たちが中心だったから無理もないが新陳代謝が激しく会員の中に質的要求のアンバラが生じるので会の運営をしていく上でなかなかむずかしい。

特に近頃は会員が職場や組織などの面の活動家になっているので、会を確実に開催すること自体なかなかむずかしい。そのため新しい会員の意欲とサークルとしての芽がしぼんでしまいはしないかと心配しているところである。

最近は文学作品だけでなく、政治経済など複雑な社会に会員の関心が向いて来たし、どちらかというと現実的な色いの強いものになって来ている。

2、これからの課題

①まず確実に例会を持つことが当面の問題である。そのために何はさておいても読書会を第一に集れる楽しい充実したうるおいのあるものにしていかねばなるまい。その意味での気遣い

作りが必要である。

②これまで５号まで出して来た文集を継続的に出していくこと。読むことと、自分で能動的に書くことを結びつけたい。

③若い人たちを中心にして、読書会で話しあったり論議したりすることが、人間形成のうえに役だちゆたかにするようなものでありたい。それだけの燃焼と情熱をもちたい。

（臼杵読書会代表）

三重町音楽協会

「来年度こそは」の合いことば

足立満喜人

音楽を通じて人と人とを結び、明るい社会をつくろう。音楽を楽しみ、暗い気持を吹き飛ばし、明るい社会を築こう。と「三重町音楽研究会」が戦後の混乱のなかで昭和24年に産声をあげた。当時会員はわずか10人、楽器といっても会員が持ち寄った古いギター、ハーモニカ等があるだけ。特に大野郡という農村地帯の土地がらだけに音楽に対する関心はうすく町民からは「道楽者の集りだ」といって批判され軽べつされたことも度々である。会の運営費の捻出も、うまくいかず資金難で解散せねばならないハメに落ちたこともしばしばであった。こうした苦しい中で会員たちは互に励まし合い、熱心に音楽を探究するとともに事業計画をたて各地に演奏活動を行なった結果、町民の音楽熱を高め、また理解も深めていった。昭和27年研究会も「三重スターダスト」に改名、会員も30数名となり、養老院等の福祉施設の慰問、防犯運動の協力、義援金の募集、音楽発表会の開催、郡町の各種行事に参画するまでに成長した会員は郡内の人々で学校教師、公務員、会社員、銀行員、農民店員等種々雑多である。昭和41年開催された大分国体を契機として学校関係にブラスバンドが編成され、また社会情勢の進展に伴い一般にも音楽が普及され、ピアノ音楽室、ギター協会、マンドリンクラブ等がいたるところにできた。昭和39年郷土の音務文化向上発展のため、これらの団体並びに音楽愛好者が大同団結し三重町音楽協会が設立された。会の事業は会員相互の音楽技術向上に関すること。社会に対する奉仕、音楽会の開催と誘致等である。これまで三重町音楽協会は過去３回発表会を開催し大分県芸術祭にも参加してきたが、昭和45年より残念ながら中だるみの状態で全く責任を感じている。この要因は一体なんであるかを追究し解明しなければならない。およそどこの任意団体にも見られるようないろいろの問題点と障壁があることを今さらのように思い知らされている。何といっても先づ第一に人間関係の複雑さ、会の運営費の行きづまりが上げられる。しかしそれは泣きごとである。意欲があれば会の運営続行はもちろん、事業もできる。ただ前進あるのみである。「来年こそは」の合いことばが空念仏に終わらないよう20余年のキャリアを生かし意義ある新年度にしなければと心に誓っている。

（三重町音楽協会長）

動物用薬品、畜産用器械専門店

回生堂薬局

大分市府内町１丁目５番２号

〒８７０　☎㉜5221　倉庫㊱0128

くさの会

大田村の自由律句会

藤原嘉久

ちかごろいろいろな意味で脚光を浴びている国東半島のなかほど西国東郡大田村に、季題や定型にとらわれない自由律俳句の「くさの会」がある。

明治の終わり「ホトトギス」から分れた河東碧梧桐、荻原井泉水は旧俳壇の打破を目ざして新傾向俳句を唱えた。この俳句革新の思潮を大正から昭和の初めにかけて県下に紹介し熱心に指導したのは長尾雅鳥であった。

当時、雅鳥に影響を受けた山田こころ（秋吉・現大田村助役）は井泉水の提唱する自由律の俳論に共感し、昭和５年同好の志と共に自由律俳句「くさの会」を結成したのである。

「俳句は自然・自己・自由の三位一体の境地における生命の躍動を、最も端的に焦点的に表現した一行詩である。俳句は一行の短詩であり印象の詩であり象徴の詩で

半官・半民

「半官・半民」〝政府と民間とが共同出資している事業形態〟と広辞苑には書いてある。

このことばは官公庁と民間が提携して事業等をやる場合、一般に広くつかわれている。ここで文化の面に目を向けて見よう。こんな話しがある

〝ある山村の一部落に古くから伝わる寄木造りの仏像があった。しかし堂は破損し雨ざらし寸前になっていた。地元民や郷土史家は「由緒あるこの像の保護を」と、その筋の役所に何度も強く働きかけた。しかしナシのつぶてでいくら待ち望んでも文化財の指定が受けられないまま歳月が過ぎていた。ある時中央官庁の調査官が他の目的でその村を通りかかり全く偶然にその仏像を見たのである調査官は驚き、「どうしていままで放置したのか」と土地の人を責めた。日を待たずして仏像は文化財になり堂は立派に改修されたという。

この話しは半官半民のことばとは見当ちがいかも知れない、しかし↗

ある。俳句に表現されたことばのリズムは心のリズムである。従って必ずしも五七五に限られることでもなくまた季語が無くてはならないことでもない」この新俳句提唱から、自由律俳誌「層雲」は創刊以来60年通巻 700号をこえている。

この「層雲」の流れをくむ「くさの会」は戦中、戦後の欠乏時代同人誌〝くさ〟や句会のための用紙がなく、印刷された紙の裏紙を使用して続け、またハガキに句を書いて交換する「くさ句信」の創案などすがたかたちを変えながら永い歳月をのりこえてきた。その間、会の結成以来〝雀の俳人〟として知られる柳川の木村緑平（医師・故人）の誠実な指導と、主宰者山田こころと、師木村緑平とのうるわしい師弟の交りが会の基礎を確立したとも言える。また木村緑平は最近流行の種田山頭火の放浪時代、その大半を援助してささえた陰の人であった。

現在「くさの会」は会員15名の少数ながら同人誌〝くさ句信〟（孔版）を隔月に発刊し、お互いの創作活動のよりどころとしているほかに、年１回句会を開催して研修と親睦を深めている。また大分県短文学大会にも参加して交流をはかる一方、〝くさ句信〟は昭和５年以来少さくそして貧しいながら連綿として雑草の名のごとく続いてきた。途中「俳句三味」「まめ句報」「くさ句抄」「くさ俳句」など名称や形態も変遷があり、戦時中は休刊も余儀なくされたが、細い一すじの道としてことし２月、 187号を数えている。

「くさの会」は荻原井泉水の壁書

- 句材は一草一木の真実を観取すべし
- 句体は一作一律の自在を志向すべし
- 句会は一期一会の随縁を享受すべし
- 句境は一生一路の信念を護持すべし

の指針を体し巧拙老若を問わず自由律俳句を創作することにより人間自己形成に資することを志しているものである。尾崎放哉や種田山頭火もこの信念をもつ同志の一人として、その境涯はそれぞれ静と動の波乱にみちたものであったが、同じ一すじの道を歩きつづけたのであった。

（くさの会幹事）

素描

昨今の文化行政は時代の背景とあいまって可成りな進展をみせてはいるがまだ分野によっては相当の遅れは否めない事実である。これは官公庁というシステムの上からの宿命的なものもあるかも知れない。

現在の文化事業はほとんど半官半民の形が一般である。これは文化という仕事の性質の上から当然の場合もあろうし、お役所は先頭に立って旗を振る性格のものでないという考え方もあろう。県下では県文化室や芸振会議の発足、地域報道機関のたゆみないキャンペーンなどによって着実な歩みを見せているが、ときには七官三民、三官七民の事業も結構である。

歴史のある文化を守り、新しい文化を創り出してゆく仕事は、感覚のよさと熱意のある姿勢でじっくり腰を落ちつけた官民の担当者と、それに協力する一般市民が半官半民のよりよいペースの中で、真剣に取り組んでゆくことが大切ではなかろうか

（F）

県立美術博物館建設はどうなっている？

「芸振」第10号の＜素描＞の欄「県立美術博物館建設総工費がなぜ４億に？」について、県教育庁矢野朔雄社会課長はじめ関係者に実状を聞いてみる。話の内容は大体次の通り。

「昨年末、新聞で報導された約４億８千３百万円という県立美術博物館の建築工事額は建物の外枠だけで、内部施工を入れると約７億近くになる。だから決して小さなつまらぬものを考えているのではない。宮崎県の総合博物館が６億４千３百20万円の建設額で昨年度建設されたけれど、宮崎の場合は美術館の展示場以外の講堂？も含まれた数字である。純粋に展示場の面積だけを考えてみると宮崎県よりもはるかに大きなものになるはずだ。ただし本県の場合、何億という建設額も決して決定したものではなく、あくまでも建設委員会の設置費や設計料をとるための基本的仮建設額である」その後新聞で『県立美術博物館設計料が見送り』と発表されたが、その理由は建設用地が正式（事的）に払い下げられていないことにあるらしい。ところが順序としては「なんといっても３月議会で30万円の建設委員会設置費をとることである。そうすれば建設委員会を早急に発足させて、そこで基本構想を十分にねることができる。そして、どのくらいのどんなものを建築するかが話し合われ、構想が生まれる。その時はじめて建築総工額が出てくる。現在の段階では何億の美術博物館が建てられるということをハッキリは言えない。また基本構想ができればそれによって設計がされ、青写真ができあがるのであって、具体的にどんなものが建築されるのかもハッキリは言えない。」ということである。

いずれにしても最後に建築される大分県としては宮崎県よりも、現在建設中の熊本県よりも立派な美術博物館が建設されてほしいものだと願っている。

（S）

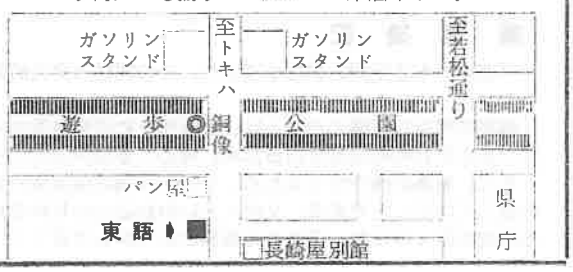
美術、書道用品専門店

東とう　語ご

大分市大手町１の３の12（遊歩公園滝廉太郎銅像を長浜町へ東に10ｍ入る多賀歯科医院下）

ＴＥＬ　㉜5520

油絵、日本画、俳画、南画、書道の用具なら何んでも揃う！一度ぜひご来店下さい。



「大分市のカラー、大分らしさとは何ですか」と問われたとき、その文化的なよさを語る何かがあるだろうか？

倉敷といえば美術館とそのほとりの運河と倉の白壁。宇部といえば戦前から音楽会場として有名な公会堂や野外彫刻展会場。「行ってみたいな」という魅力をもつ特色を備えている。

京都清水焼の窯元さんと話をしたとき「京都は日本人のふる里ですよ。一生に一度はぜひ帰ってきてもらいたいと思いますね。」と胸をはってほこらしげに語ってくれたことを忘れることができない。

ひるがえって大分を考えるとき、あのグロテスクな怪獣のような白赤の集合煙突や、海岸に林立するコンビナートのつめたい銀色の鉄塔を文化的象徴として胸をはって語ることができようか。

そしてまた、僅かに残った白砂青松には、ビニール袋の廃品がうちあげられ、松喰虫があばれ放題ときては、大分はまさにGNP犠牲の典型ではないだろうか。

その部落、その町にとって、地域の歴史をきざんできたかけがえのない一本の松、一本の銀杏、路傍の地蔵さんや、ほこらが、相談もなく切り倒され、破壊される無神経さの上にたって「明るく豊かな住みよい街づくり」「みどり映ゆる躍進都市大分」とは一体何であろうか。

波紋

「大分（おおいた）らしさ」とは何だろう

木村成敏

かって上野ヶ丘高校本館が重要文化財の指定を解除され、解体されようとしているとき、一方では「文化財保護のための標語」が大々的に募集されるという二律背反をどう考えたらいいのだろうか。

教育なら長野県といわれてきたその長野県の学都、松本市にある開智学校、民芸館、日本のロダンといわれる萩原守衛の作品を展示した碌山美術館、国宝松本城など、そしてその背景となっている雄大な日本アルプスの連山との調和、一度、訪ねたら一生忘れることのできない高い文化の香り。

それは、決して観光めあての植民地的な、あげ底文化ではない、本ものなのである。これこそ堂々として築いてきた「文化遺産」をまもり、わが生れたまちを真の意味で明るく住みよい豊かなものにする」ための、みんなの誇りある努力の産物ではないだろうか。

「〝上野の森〟をまもり、美術館や芸術文化会館をつくらせるための一つ一つの運動が、「忘れることのできない大分」を生み出す貴重な行為であるという自覚にたってもっともっとがんばりたいと思う。

（県芸振会議理事）

消息

○第二回九州沖縄芸術祭文学賞最優秀作など決まる。

財団法人九州沖縄文化協会（福岡市）は九州各県・九州各県教育委員会・北九州市・北九州市教育委員会・琉球政府共催。（大分県芸術文化振興会議協賛）のもとに「昭和46年度九州沖縄芸術祭文学賞」の作品（小説）を募集したが、地区優秀作8編を対象に選考の結果、最優秀作（賞金10万円）に「オープンセサミ」森田定治氏（北九州）が決定した。同作品は、文芸春秋刊行の「文学界」3月号に掲載される。

また、大分地区優秀作には「闇草伝米」高橋与一氏（姫島村）大分地区佳作に、「聖母の館」小郷穆子氏が入選した。

○昭和47年度青少年芸術劇場公演決まる。

「青少年芸術劇場」は青少年に音楽、演劇等のすぐれた芸術を鑑賞する機会をより多く与え、芸術への理解を高めるとともに豊かな情操を養うことを趣旨として、毎年文化庁と大分県教育委員会が共催で実施しているが、これは14歳から19歳までの青少年を無料で招待する。

昭和47年度は次のとおり決まった。

1日時　7月29日13時（時間は予定）
2場所　別府市　別府国際観光会館ホール
3演目　バレー

○大分の文芸発刊される

大分県教育委員会では大分の文芸「大分県文芸作品選集」1971年版を発刊した。

昨年の第1集につづくもので、昭和45年1月から46年10月までの期間、県内発行の紙誌や個人作品集に掲載されたものの中から優秀作品を推薦していただき、まとめたもの。部門は短歌、俳句、川柳、里謡、現代詩、小説の6部門からなるA5版で70ページもの。

○補　追

先号もれの県芸振会議会員は次のとおりです。

藤原　貞義　　千本　延隆　　加藤真一郎

編集後記

「芸振」も2年間、11号を迎えた。その間県内文化活動をジャンル別に一巡したつもりであるが、ある部門はまだ登場していない。

編集を担当して感じたことは、計画通りに原稿が集まらないこと、編集者が勤め人であり、また、ある文化団体の事務をしているかたわらの仕事であるため、専心できなかったことなど、いろいろな難点があった。

また、編集計画をたてるため、ジャンル別に関係者に会ってみると、それぞれ各部門とも実情がちがい、むつかしい問題を内包していることである。文化人といわれる人たちがそれぞれ各自の意見を持ち、強い個性をもっているだけに、対立、派閥の傾向が強くみられ、芸術文化振興のむづかしさをつくづくと感じさせられた。